



~ News Letter 創刊 ~

2008年6月15日に設立された本学会は、学会員みなさまのおかげで、早1年余の月日が経ちました。そこで、お待たせしました！ **News Letter**の記念すべき第1号をお届けします。

学会設立と同時に開催された**第1回年次大会**(2008.6.15)では、「**看護倫理のタペストリー ~ 看護倫理の可能性をひらく ~**」と題して、**高田早苗氏**(前神戸市看護大学)を大会長とし、450余名の方々と共に、本学会の可能性をひらく大会となりました。本学会は看護倫理について、その定義や探求方法、倫理原則や理論と看護倫理の関係、現場の問題とその解決等について、本格的な議論を行うことのできる、会員参加型の学会運営を目指しています。こうした意義において、これまでの学会とはひと味違い、現場主義である実践・教育・研究をと願い、**第2回年次大会**(2009.6.6)では、「**看護の心としての倫理：実践・研究・教育の協働**」と題して、**小西恵美子氏**(佐久大学)を大会長とし、700余名の方々と共に、たくさんの示唆や学び、気づきのある、実り多き大会を開催することが出来ました。学会設立後1年にして、このように多数の参加者の方々が佐久に集われ、熱心な議論が展開されたことから、看護職における「倫理」に対する関心の高さを感じ、学会としても責任を持って、これからの皆様方との協働をどのように展開していくかという点について、一緒に考えていけるような礎づくりを担っていかなければと考えています。第2回大会の様子は、近く発行される学会誌にて詳細をお伝えすることになりますが、この**News Letter**では、主催された佐久大学の方々や参加者からの声をお伝えしたいと思います。

さらに、「**看護部倫理委員会の活性化に向けて**」というテーマで、先日(2009.9.27)大阪(大阪府立大学中之島サテライト)にて開催された、ワークショップの様についても、主催した当学会**学術活動推進委員会**や参加者からの声を併せてお伝え致します。

上記について、開催後少し時間が経ちましたが、参加されたみなさま思い出しながら、今年は参加できなかったみなさまは想像していただき、来年6月に札幌にて開催される大会に向けて、備えていきましょう！

看護教員としておもうこと …… 福島県立医科大学 看護学部 家族看護学部門 川鍋沙織

看護の発展のために、実践・研究・教育のそれぞれの立場から、どのように協働するの
か…ということ、この学会に参加することによって考える機会になりました。大学院博士前期課程での研究を行
い、この4月から母校で教員となった私にとって、それは日々感じる大きな課題であったからです。
最も印象に残った keyword は**〈信頼〉**と**〈尊敬〉**でした。**〈信頼〉**の基本は、相手との知識の共有、**〈尊敬〉**は相手
と同じところ・違うところを敬うということでした。助産学生の実習を担う私にとっては、当然のことながら教育の場に
身をおくもの同士、すなわち教員同士の協働と、実習先である実践の場との協働は不可欠です。臨床の助産
師・教員個々人が持つ助産観のなかで、学生が何を感じ、考え、学んでいって欲しいのか、そのためにはどのよう
にサポートしたらよいのか、ということについて、**〈信頼〉**と**〈尊敬〉**をベースにコミュニケーションを図り、協働すべきだ
と思います。助産師が女性と家族に寄り添い、彼女らの主体性を尊重することは、女性と家族の満足のいく出産
体験や育児の自信につながります。したがって、女性や家族にとっての主体性とは何か、それを尊重するためには
助産師はどうあるべきなのか、一貫して学生に伝えていくためにも実践と教育の協働をより深めていくことが課題だ
と思います。さらには、個人の体験として大切な場を、実習を通して学ぶ機会として協力してくださっている女性や
家族に感謝の念を忘れることのないよう、学生に働きかけることも大切であると考えます。このことが、対象者を尊
重したケアを実践できる助産師として、学生が育っていく手助けになるのではと改めて思いを深めました。

第2回年次大会

**「看護の心としての倫理：実
践・研究・教育の協働」
参加者の声**

知的な体験をした一日
でした。歯を食いしばっ
て善をなすのではなく、
自然に自ずから最も適
切な判断を発見し、率
先して実行できる徳を
人格を育成することが
大切ですね。

居心地の良い学会でし
た。大学、学会が出来
ることを考え、病院の看
護部、教員と共に、看
護倫理についての語り
に花が咲き、身近に感
じられ、みんなが集う意
義がありました。

臨床を振り返っておもうこと …… 東京医科歯科大学生命倫理研究センター 二井奈保子

「倫理」という言葉に若干のアレルギー反応を感じていたのは私だけでしょうか？

大学時代、生命倫理学として倫理を学び、また、哲学や心理学からも医療的な側面から倫理にアプローチして
考える機会はありませんでしたが、病棟勤務時代5年間にこの言葉を思い浮かべる余裕はありませんでした。しかし今振
り返ると、日々の業務、ケア、患者さんとの関わり、患者さんとの関わり、患者さんや私たちを取り巻く環境、と隅か
ら隅まで気付けばそこに「倫理」的なものが絡み、時には答えの出ない問題・疑問として胸の奥に秘められたままに
なっていることも少なくなかったと思返されます。こうしたことは、何とかしたいけれど何とも出来ずに置き去りになっ
ていることが多く、そのうちまた同じような場面に遭遇しても、解決の糸口が見えず、ジレンマに陥るといったパターンは
誰もが経験することではないでしょうか？ 今回この学会で感じたことはまさに、「こうあってほしかった！！」というこ
と、つまり**〈実践・研究・教育の協働〉**でした。実践の場で感じとまどう問題・疑問に向き合い、「よりよく」を求め研
究を行い、看護職が総出で協働し、いつでも相談し合って看護全体をボトムアップさせるというのは、「こうだったら
いいのに」と日々感じていたことでした。Anne Davis 先生のお話では具体的な方法が提示され、シンポジウムでは
「そうそう、そういう時にどうしたらいいか悩むんです」と頷き、考えさせられました。また、実践からこれだけ沢山の研
究が発表されていることを恥ずかしながら初めて知り、かつ多忙な中で取り組む熱意に敬意を表したいと思いま
した。今年4月から勤務する当センターでは、研究の倫理審査について関わることになり、研究は私にとっても身近
なものになりました。実践でも研究でも教育でも、倫理は気付かずとも根底にあり、自然に実践しているもの。すこ
しアレルギー感を取り払い、自ら歩み寄りたいたいと感じた学会でした。

ワークショップ「看護部倫理委員会の活性化に向けて」2009.9.27 於：大阪

企画：学術活動推進委員会

話題提供者：山内はるみ（聖隷浜松病院看護部課長 院内認定総合相談看護師）

野口 忍（北摂総合病院訪問看護ステーション所長）

勝原裕美子（日本看護倫理学会学術活動推進委員）

～ワークショップを企画して～
学術活動推進委員会 委員
ウイリアムソン 彰子

平成 21 年度の年次大会で学術活動推進委員会が行った交流集会で、「倫理委員会の設置は増えてきているようではあるが、なかなか機能していないのが現状」という意見を受けて、今回のテーマは「看護部倫理委員会の活性化に向けて」としてワークショップを企画しました。

当日の話題提供では、聖隷浜松病院の実践について報告がありました。聖隷浜松病院では、院内に倫理に関する委員会が9つ設置されており、定期開催以外にも必要に応じて迅速委員会が召集されるということです。組織の中に倫理に関する問題を先送りせず話し合う場があるということで、患者や家族、そして医療者にとっても意思決定を支援する仕組みがあるということが分かりました。倫理的な課題を現場から吸い上げるためには、院内認定総合相談看護師が配置されており、日々現場をラウンドして職員に働きかけているということです。北摂総合病院訪問看護ステーション所長の野口さんの発言にもありましたが、医療現場の意思決定では「ケアの倫理」と「キュアの倫理」が大きく衝突することがあります。聖隷浜松病院の認定総合相談看護師の山内さんから紹介された事例では、看護課長自身も無理だろうと思いつつ拳がってきた事例で、「患者さんや家族にとって何が最善か」を話し合う場を設定したことで、在宅へもっていくことができたということでした。他職種も含めて意見交換をすることの重要性、話し合いによって不可能を可能としたということで、勇気をもらうことが出来る事例でした。その後、小グループで意見交換をしました。

「看護部倫理委員会の活動の現状と困っていること」については、主に、**現状では事例を話し合っ**て終わっている。**看護部倫理委員会で取り扱うべきことは何か？ 医の倫理と看護の倫理を分ける必要があるのか？ どうやって倫理的感性を高められるのか？ 現場の事例を吸い上げるにはどうするか？ 看護の役割そのものが倫理のリーダーであるべき、リーダーシップをどう発揮するか？ イジメやパワハラを検討する場所はあるのか？ 倫理委員会ではなく、リスクマネジメント委員会などを利用している。 研究倫理審査を実施するにあたり、例えば、抑制の是非に関する研究を審査するのに、基本的な考え方を知っているか否かが問われるのではないかという問題がある。** という課題が話されました。これらを受けて引き続き、「倫理的感性を高めるためにどうするか？」「看護部倫理委員会の役割と機能は何か？」「看護部倫理委員会と院内倫理委員会の連携をどうとるか？」ということでディスカッションをしました。参加者からは、**（倫理を定義してくれる人（場）が院内にいない。）（話し合いをするためには、倫理的なことを可視化する必要がある。そのためには言語化する習慣をつけることが大事だとわかった。）（実際の事例で検討することを通して教育するのが効果的だろう。）（看護部委員会はそのコアメンバーを育てる意味があるだろう。その人たちが中心となって病棟内で話し合えるようにする必要がある。）（倫理問題は気づいた人がリーダーとなってやっていかなければならない。）（現場の話し合いで解決できないことを全体の倫理委員会にかけると必要があるが、現場で話し合うことで、医師との信頼関係をもっと築いていくが大切だと思う。）（Dr を巻き込むためにデスクンファレンスなどで必要なメンバーを入れて話し合いの場を設定し上手いいった。）（決して医師が悪いわけではなく、話し合うことで理解を深めることができそう。）（倫理的価値観が異なることを相互理解することが大切だろう。）** という意見が出ました。参加者は、自らがリーダーシップを発揮して組織的に活動していくことの重要性を認識する機会となったと思います。

～ワークショップに参加して～

姫路赤十字病院

母性看護専門看護師

小林 仁美

勤務している病院では、看護部倫理委員会が設置されておらず、日頃から倫理について話し合い検討する場、研究倫理について審査する場、実習受け入れ機関として教育倫理について検討する場が必要ではないかと感じていたため、既に看護部倫理委員会が設置されている施設の方々のお話が聞きたいと思い参加した。

最初に聖隷浜松病院での倫理関係の委員会や会議について勝原副院長からご紹介があったが、病院全体として倫理委員会や医療倫理問題検討委員会はあるものの、看護部倫理委員会がないことに、ワークショップのテーマと違うこともあり驚き戸惑った。話を聴いたり、その後の質疑応答で「そもそも看護部倫理委員会が必要なのか？」という所に立ち返ることとなった。

倫理について常日頃から検討する機会があり、演者の聖隷浜松病院の山内先生のように倫理について何か困っていることはないかとラウンドをされる等、病院風土として意識が高ければ、確かに看護部独自の倫理委員会は必ずしも必要ではないかもしれないと感じた。しかし多くの病院では、对患者や家族のケアにあたってのベッドサイドでの事例検討や、研究や教育分野だけのことでなく、職員間の人間関係のトラブル、各種ハラスメントのこと等多岐にわたる事柄を扱うにあたり、倫理感性を高めるための教育啓蒙活動などの取り組みが、まずは看護部独自に必要なようになってくるのではないかと感じた。このことについては、グループワークについても同じような意見が出された。各個人それぞれ生育環境の影響も受けながら倫理観はもっている。しかし組織で、或いは専門職として働く以上、共通の倫理についてのコンセンサスをもつことは必要ではないかという議論になった。

グループメンバーの所属施設の状況はそれぞれ異なり、既に看護部倫理委員会が設置され有効に機能している施設もあれば、有効とはいえず行き詰っている、或いは限界を感じている施設もあった。グループワークの結果、まずは自分の所属している組織や既にある委員会・医療チームなどを知った上で、既組織との関係の取り方(組織図上の位置)や看護部倫理委員会としてのビジョン・計画などを練った上で設置することが、軌道に乗せ活性化することにつながるのではないかということでもとまった。そして各個人でのその場での逃避的な倫理的問題の対処は、結果的に倫理的問題を繰り返すことになるため、答えがないまま悶々としてストレスがたまってしまふことのないよう、職員一人ひとりが生き生きと働けるように相談出来る機関として、また方向性を決定したり周知徹底出来るよう機能していくことが求められると話し合われた。

今回ワークショップに参加して、倫理問題に気付いた人から対策を考えていくことが必要だと痛感した。それぞれの施設の状況は違うため、個々の状況に合わせた倫理問題について話し合う場の確保や活性化に向けた長期的なビジョンをもっておくことが必要と感じたので、思考錯誤になるとは思いますが、一つずつ着実に倫理について丁寧に向き合っていきたいと思う。

～編集後記～

初のニューズレター、楽しんでいただけましたでしょうか？ これからも少しずつ改善して、読みやすく役立つ紙面作りを目指していきますので、どうぞよろしく願いいたします。

また、ホームページ(URL:<http://jne.umin.jp/>)も開設しています。論文投稿、周りの方の入会など、どうぞ参考にしてください！！(広報委員会一同)